

北海道民話の研究 (その3)

— 工藤梅次郎『アイヌ民話』の考察 —

阿部敏夫

目次

はじめに

- I. 『アイヌ民話』の体裁・はしがき・序文・(あとがき)・広告掲載社について
 - 1) 体裁
 - 2) はしがき・序文・(あとがき)
 - 3) 広告掲載社
- II. 『アイヌ民話』の構成・内容について
- III. 工藤梅次郎の略歴について
- IV. 工藤在帯広時代の新聞界
- V. 『アイヌ民話』の背景—時代・吉田巖—
まとめ

はじめに

私は、「和人」がアイヌ民話を通してどのようにアイヌ民族理解をしようとしたのかという視点で研究してきた。この視点での研究は管見だがまだ未開拓の部分である。特に大正期の新聞人がアイヌ民族との出会いから民族の生活・精神世界に感動して、アイヌ民話に関心を寄せた。例えば、青木純二、中田千畝、河合裸石、今回考察しようとする工藤梅次郎等はアイヌ民話集発刊を行う事でその感動を結実しようとした。私は青木純二と中田千畝については現在まで若干の考察を試みた⁽¹⁾。今回は、工藤梅次郎とその著書『アイヌ民話』、協力者、略歴、内容、時代的背景等について考察したい。

I. 『アイヌ民話』の体裁・はしがき・序文・(あとがき)・広告掲載社について

1) 体裁

著者・小樽新聞記者 工藤梅次郎 (表紙題字)
発行・工藤書店

小樽市花園町東2丁目11番地

発行者・工藤修三

電話 3245番 振替 小樽2904番

発売元・高橋至誠堂 帯広町大通り

電話 12番 振替 東京14067番

印刷所・清田印刷所

十勝国帯広町大通5丁目7番地

印刷者・清田惇作 同上 9番地

発行日・大正15年3月15日

定価・金貳圓 B6判

はしがき・序12p, 目次10p, 写真,

本文・挿絵220p

奥付, 広告掲載・10社

2) はしがき・序文・(あとがき)

「はしがき」は大正15年3月著者工藤梅次郎によって書かれている。その内容を抄出すると次のようになる。

私は永年、小樽新聞帯広支局に在勤してゐたので、近在の伏古コタンや音更コタン、其他のアイヌ部落を訪れて、古老達の話や聴いたり、またアイヌ研究家に接して話を

交はず機会が、可なり多かった。さうして、その纏まったものは、大概記事として取扱ひ、新聞雑誌に掲載したものであるが、いつも書けば書きっぱなしで、切抜きなどはとって置かなかつた。

ところがこの程、妹達の切りとって置いたものが、書棚の中から発見されたので、そのうち30数篇を抜き、それに古いノートの控えから稿を得て、此書を編むことにした。

書名「アイヌ民話」と題したのは、含まるゝものが、お伽噺もあれば童話もある、ウチャシクマ(古事)もあればオイナ(物語)もあり、情話もあれば哀話もあるといった風に、何でも主義を採ったからである。初頁の1から16まで番号を附した稿は「この頃のアイヌ」に関するさまざま話である。

(中略)文字の無い彼等の伝説は、よしそれが、有り得べからざることであつても、くだらないことであつても、彼等民族が毎代、之を承認したものであれば、貴い民衆的産物として取扱つてよいと思ふ。

近年、アイヌ民族は著しく和人化して来た。飾り気もなく巧みも意図もない天真爛漫の固有の物語が、口から口へ伝承されて、漸く今日まで遺存されてはゐるものゝ、時勢の影響によってその本来の古色を失ひ、アイヌ自身ですら之を口誦するに、その独特の匂ひを嗅がしめぬやうになつてゐる。今後数年の後には、之を求めるのに、必ずや多大の困難を感ずるにいたるであらう。

(中略)

この書に収めたものは、悉く十勝で蒐めたものであるから、自然十勝アイヌを中心とした民話である。(中略)

たゞ、このつらねたものによつてすこしでも、衰残民族の歩いて来た道を、偲んでいたゞけば、もうそれで満足なのである。

上記の「はしがき」には、本民話集の発行

に至る事情、アイヌ民話の内容・収録地域・工藤自身の思いが述べられている。新聞人工藤としての気概が感じられる。アイヌ民族が往時置かれていた状況からアイヌ民族を「衰残民族」と指摘している。

この「はしがき」の後に那須正夫(河西支庁長)、安田巖城(新聞記者・歌人・アイヌ農事開墾組合の管理⁽²⁾人等)の序文、推薦文というよりも自分自身のアイヌ民族に関つた心境を3頁にわたつて書いた吉田巖⁽³⁾が序文を寄せている。「10年変わらず」(吉田巖の文)アイヌ民族と関わつてきた工藤の人の人柄・人脈を推し測る事が出来る。

また、(あとがき)として「『アイヌ民話』の後に 伝説の価値」と題して松山亮⁽⁴⁾(帯広大谷中・高等学校長 詳細は東北北海道人物大観(十勝帯広篇)昭和25.12参照)が4pにわたつて記述している。

「大変時宜に適した出版物としても価値あるものと考へた。……わたくし達は、されば、こゝに、いよいよ、伝説、御伽の中からも、その価値を見出し得、その必然的意味を汲み取り得る程豊かな思想家となり、芸術家たり得ることを希求すべきである。」

安田巖城、吉田巖、松山亮らの知遇を得た工藤梅次郎は地域の中で文化人として活躍していたことがわかる。地域に対しての影響力もあつたことが推測される。

3) 広告掲載社

—10 社の内訳 (店名・住所・取り扱い商品)—

- ①スズラン堂 中西商店 帯広町西2条9-13 文房具・書籍・運道具等
- ②東海堂書店 東京市京橋区銀座3-1 “アイヌ民話” 東京方面発売元
- ③吉田榮陽堂 帯広町大通9 書籍雑誌・楽譜楽器類
- ④笹谷一貫堂 帯広町西2条9 新刊書

籍・雑誌，参考書類

- ⑤上野文化堂 帯広町大通 8 新刊書籍・雑誌，文房具類
- ⑥島村巨人堂 帯広町大通 8 運道具一切
- ⑦清田五峰堂 帯広町大通 5 出版（発行所）
- ⑧工藤書店 小樽市花園町東 2 新刊書籍・雑誌，教科書販売，古本
- ⑨富貴堂 札幌市南 1 西 3 出版（発行所）
- ⑩至誠堂 十勝国帯広大通 7 新刊書，雑誌，文房具類，運道具と楽器

上記の広告掲載 10 社を見ただけでも帯広はもとより小樽・札幌・東京まで販売網を持っていたことがわかる。発行部数が現段階ではわからないが図書館文献検索の状況からかなり流布していたことが推測される。

II. 『アイヌ民話』の構成・内容について

内容は，3 部から構成されている。1 部は「この頃のアイヌ」，2 部は「ありし世の物語」，3 部は写真・挿絵目次から成っている。

一部は，1. 和人化した語調 2. 服装とその好み等を始めとして 16 項目にわたってアイヌ民族の生活習慣・気質・民謡・宗教・経済観念等について記述している。16 項目に続いて「熊送り・口琵琶・彼等の記憶力」の 3 項目の記述がある。

二部は，シベ物語・カナメの跡を始めとして 94 話の民話が収録されている。

三部は，メノコ（北山晃文氏画）・田川氏一行と著者を始めとして包紙・口絵・銅版画・挿絵・写真等 16 葉が収録されている。

その構成・内容の詳細は以下の通りである。

『アイヌ民話』の構成と内容

一部 この頃のアイヌ	※注・阿部
一，和人化した語調	50 代以下のアイヌは和人に同化された
二，服装とその好み	和人らしくなるように気をつけている
三，昔ながらの家屋	伏古コタンの 60 戸余りの大部分掘立小屋
四，熊送りの禁止	伏古コタンは大正 10 年 12 月が最後
五，好きな酒	酒はアイヌに付きもの，近年行儀良くなった
六，熊捕りは駄目	熊捕りの勇敢な行為，喧嘩に向けられる
七，出生率の向上	都会に近い部落アイヌほど出産率が向上
八，純朴さの欠如	（和人が原因か）猜疑深く純朴さ欠如
九，経済観念はゼロ	全部とは言わないが現ナマ握れば立ち飲み
一〇，今は自由結婚	オツテナ（酋長）制度消滅で問題処理で弱る
一一，メノコを妻に	吉田巖校長の許にメノコ斡旋の手紙あり
一二，メノコ気質	やさしい気質で静かで，夫にも温順
一三，ピリカ，メノコ	十勝メノコは美人系に属する
一四，民謡について	ヤイシャマナー単純露骨淋しき，研究は今
一五，宗教方面	信仰神多い，キリスト教・佛教も，埋葬多い
一六，貧富の懸隔	旧土人保護法下 25 年で貧富の差著しい
熊送り	儀式を詳述。儀式も今日廃れようとしている
口琵琶	婦女とか若者の娯楽として使用
彼等の記憶力	彼等の記憶力強烈，『東蝦夷夜話』引用

二部 ありし世の物語	衰残民族の歩むで来たありし世の物語 ※注・阿部
シベ物語	カナメ一族とシベコタン, コロボックル伝説
カナメの跡	カナメ一族の滅亡, 十勝アイヌの先祖
神々の雪合戦	天上の雪合戦とオイナカムイの事業
陸地は斯くして	後方羊蹄山にコタンカラカムイら降臨
犬から血をひく	北海道アイヌ由来 (娘・犬・アイヌと子孫)
福壽草	チライムシ (福壽草) の由来
女神の呪ひ	結婚・離婚 (十勝嶽と阿寒嶽) と地名由来
フリの失敗	大きな鳥の自惚と傲慢心
夜には働くな	夜遅くまで働くと神罰がある (病氣・若死)
魔の神の最期	魔神と二人の若者 (オキクルミと放糞の人)
三星と六星	星由来 (三人の勤勉男と六人の懶惰女)
おそろしい石	カムイシマと呼ぶ黒石を踏むと病死する
黒毛の鹿	十勝嶽ほとりの黒毛鹿は神の贈物一勝手話
生き残る風の神	一匹の蜘蛛 (トド松) と神々の酒盛・風の神
鹿と兎	鹿と兎の仲の悪い由来 (十勝アイヌ伝説)
白羽の矢	若者と娘の悲恋と百合の花
ふくろとイケマ	梟とイケマの話, 梟の容姿由来
獵の門出に	犬と猟に出かける時のヤイシャマネー
地獄に迷ふ	ウエンメノコ (悪女) が蛙に化生
はりと變事	夜中の叫び声は人が死ぬ (諺)
山靈に化す	十勝ポロシリ嶽の落雷死除け
米が出来ぬ	粟・稗の神と米穀の神
裸むぎの由来	内地の麦の種盗みと裸麦の由来
神様のお怒り	ウスヌプリ噴火の由来
猫の執念	猫の復讐と教訓
メコとカメ	聴き間違いから転訛し常用化
暦法が無い	十勝地方アイヌの陰暦・年中四季
金の珠, 銀の珠	蛇にもらった二つの珠と犬, 猫 (日高)
うば百合	姥百合を食料にする
ほととぎす	フチトット (ほととぎす) の由来—姥百合
お月様の悪戯	お月様につれて行かれた怠け者の妹と姉
腰が凍てつく	怠け兄ペナンベ, 尻腰をマサカリで打ち絶命
鳥の實が一杯	小鳥を捕る物まねをして自ら死んだ上の人
失戀から酒樽へ	恋する若者不漁, 酒を飲み楽しむ
母の語らひ	妻の下で楽しんだ夫のことを我が子に語る
子守唄	嬰兒を差し上げて唄う (鳥は何処にとまる)
雲の神さま *クシロ	雲の神様に育てられた若者 (戦いで両親戦死)
川傳へに戦ふ	石狩・十勝アイヌ絶えず戦さ, 諸倒れで衰滅
偉い警告をはく	十勝アイヌ, 石狩・十勝アイヌを仲良くさせる
厚岸の蠣岩	サケロクというアイヌ, アッケシは良い所と
姉に恨まれた妹	妹を妬んだ姉が殺される。妹子宝に恵まれる

北海道民話の研究（その3）

日の女神を救ふ		アイヌラックル日の神を救う。魔神は地獄へ
お月様生き返れ		十勝アイヌの日蝕・月蝕の迎えかた
烏の鬼攻め		天の鬼がお日様を呑み込み日蝕・月蝕に
物言はぬ犬		犬が物言わぬ由来、粟の種盗みを告げ口
學問の無い理由		學問、米等をサマイクルから殿様が盗んだ為
鳩のなき聲		鳩の鳴く訳はつらい目にあうから
鯨肉の美しい娘		継母に苛められた娘、死を乗り越えて幸せに
慾張り爺さん		欲張ったり、ものうらやみはするな
魔神滅多斬る		飢饉神をアイヌラックルをやつける
雷神の落下		雷神とアツツシを織る樹
神さまの恵み		神はオキクルミの日頃の行いに恵みを授く
川うそと狐		狐が赤色で、頭がペチャンコの由来
雨乞いの犠牲者		ヒリカの犠牲的精神でアイヌを救う
偉丈夫サカナ	* 虻田	サカナの出自、石狩アイヌとの出会いと娘
唯一の尊い祈り		尊崇且つ謹厳な大祓の祝詞（男子のみ）
多獲の上にも	* 歌謡	鱒鮭等早く川を遡って、食膳を賑わしてくれ
燃ゆる戀情		ヤイノカをメノコにした若者
逢い引きの唄		ペチカとコチブショエの悲恋
半穴居の小人		コロポックルの住居跡（芽室・羽帯）
靈鳥		靈鳥ニヤシコルカムイ日高アイヌを助ける
カケスは好い鳥		カケスのお陰で命拾い
不思議の女		フレウの住んでいた所は恐ろしい
眼の悪魔除け		十勝アイヌの眼病を治した酋長
伏古の神居沼		チホマトウの歴史と祈祷詞
メノコ城		北見アイヌを退却させたメノコ達（豊似）
戦勝の地旅来		カンカンピラの地名由来
無線電話		シブサラ城の伝説
寶のやり取り		近藤重蔵サルル山道を開く
不思議な湖		トヨニヌプリとカムイトウ
野火を喰止む		ラッコ川とアエプシュマムという小川
和人雪に斃る		十勝川合村の和人の雪斃れと一本の樹木
水に苦む嫌侶		本別の古戦場
奇しき大盃		芽室村毛根太田チャレンガ家の太刀・銀盃
美しい樓殿		サチナイ（札内）川の二つの伝説
千里眼		ノイボロイクシ（透視の功を積んだもの）
辨慶日、十勝は好い國		十勝の義経・弁慶伝説
かしの大樹		大水害の時、アイヌ達柏の大樹に助けられる
帯廣川の昔と今		帯広川の凍結
熊を誘殺する處		音更村下音更のチャシコツウンナイ古跡
名無しの川		豊頃村茂岩付近の小川名
成程ニシパ		和人の入植開始（明治16、7年）
湧洞湖		沼の主伝説

かうして名づく	芽室村毛根半里南の高台と小川
徳川の樹	笑い話, 盗伐の話
風の起る薬	笑い話, 宝丹薬
鈴蘭の花敷で	若い男女の悲恋
口先が曲がる迄	サロルンという鳥と熊
小神居古潭	サホロ川の魚捕り
カン助翁と鋭峯	芽室太のカン助古老の話 (子殺し, 案内役)
天文學	天候に関する俚諺
地震をかう思ふ	魚が動揺する毎に地震が起きる
ワケオツテナの娘	イブイマツの悲話
ハゲの三太郎	郵便配達三太郎の話 (伏古コタン伏根弘三)
あゝ背の君	哀れにも者悲しいヤイヌマツの話

三部 挿繪目次
メノコ (北山晃文氏書)
田川大吉郎, 河野恒吉氏一行来道の際, 著者の案内で伏古コタンを訪ふ。その時の記念撮影 昔ながらの家屋 (銅版)
熊送り
口琵琶 (ムックン)
爐邊の古老 (北山晃文氏書)
サピンノトクと娘
老媪
盛装の一族
チャランケ
偉丈夫サカナ
イクレシエの娘
縫取模様のアツシ
熊送りの具
家寶
ある家の前
ヤイヌマツ

一部「この頃 (大正 15 年) のアイヌ」の部分では, 19 項目にわたって工藤の眼を通して「衰残民族」としてのアイヌ民族の状況を記述している。(注・阿部のコメント参照のこと)

二部「ありし世の物語」の民話採録地域は, 十勝地方を中心としているが釧路・厚岸・日高・虻田・小樽地域も採録されている。また, 内容は生活と密着している地名の由来 (湖・川・山等), 自然現象 (風・雷・地震・星・月

等), 鉱物 (石・岩等), 動植物 (柏・姥百合・福寿草・カワウソ・カケス・鹿・熊・鳥・兎・梟・猫・犬・鯨等), 英雄・偉人 (カナメ・サカナ・カン助・三太郎等), アイヌの神々 (魔の神・アイヌラックル等), コロボックル伝説, 俗信・教訓等の言い伝え (怠けるな, 夜には働くな, 物うらやみをするな, 天候に関する俚諺等), 義経伝説のようにアイヌ (人間) 世界が民話を通して紹介されている。

工藤梅次郎が実際に経験したこと（「はしがき」）をもとに94話の民話や挿絵・写真等が収録されている。『アイヌ民話』として、十勝地域のアイヌ民話が収集された意義は大きい。但し、二部の94話の民話が、アイヌ民族の民話伝承を正確に記録化しているかどうかの検討は今後の課題である。

III. 工藤梅次郎の略歴について

『新聞人名辞典』第2巻 日本図書センター
1988年2月25日 中の「新聞通信従業各員
個別名鑑 大正11年6月現」に、次のように
工藤梅次郎の略歴が紹介されている。

工藤梅次郎（朴民）

小樽新聞帯広支局主任（大3．7入社）。
東京日日通信員。盛岡（明20．4）生。妻
子3人。中央大学法律科。【新聞歴】東京日
日。【著作】アイヌの伝説。【思想】人類相
愛主義。【趣味】アイヌ民族研究。【現住】
北海道十勝国帯広町西3条10丁目（電19）。

同一の内容で、『名鑑』大正13年版、大正
14年版、昭和2年版にも掲載されている。

また、『新聞人名辞典』第3巻の「新聞人名
鑑附録（各社々員名簿）」新聞之新聞社 昭和
3年12月20日第1版発行には、

小樽新聞社 小樽市港町16番地 電話代
表 1500 振替口座小樽20
役員 社長・取締役・監査役・参事・顧問
10名
編輯局 局長以下8名中に 整理部長 工
藤梅次郎の名がある。
営業局・総務局 局長兼務 経理部長 支
社・支局 樺太含め道内19
東京支局 監督・支局長各1名 大阪支局
長心得1名（注・工藤以外は人数のみの
記述。）

工藤梅次郎は、帯広に昭和2年まで在勤し
翌年整理部長として小樽に転勤したことになる。
工藤は全国の人々を対象にした「新聞人名鑑」
の中で「人類相愛主義」「アイヌ民族研究」と
堂々と表明している。工藤の「アイヌ民話」に
寄せる思いをみる事が出来る。尚、『名鑑』中
の【著作】「アイヌの伝説」は、「アイヌ民話」
の誤記であろう。

IV. 工藤在帯広時代の新聞界

『帯広市史』(昭和51年3月, 729)によれば、
小樽新聞は明治43年10月に帯広支局(支局長
森脇光民)を置く。すでに「帯広新聞」(明治
31年9月)「十勝新聞」(35年)「新十勝」
(38年7月)「とちかち新聞」(明治42年8月)
というように発刊・廃刊をくりかえす状況であ
った。支局は「北海旭新聞」(37年)「北海
タイムス」(40年4月)と「小樽新聞」であ
った。そして、「小樽新聞」の森脇が「十勝日
日新聞」(大正元年-4年3月から日刊)を創刊、
同氏の死去(7年6月急死)後も続刊する。
「旬刊帯広新聞」(8年6月)創刊、後日刊「十
勝毎日新聞」と改題続刊。日刊「十勝新報」
(昭和2年春)創刊。

上記のように工藤が帯広支局時代は新聞の
創刊・廃刊が続出する。従って、大正2年に
赴任した工藤が小樽に転出するまでの帯広
(人口3万人)は言論華やかな時代であったと
いうことが出来る。この帯広の新聞界は、工
藤編纂の『アイヌ民話』の普及には大きな役
割を果たした。例えば、大正15年(1926)3
月17日付「十勝毎日新聞」は、〔広告〕小樽
新聞記者 工藤梅次郎著 新刊アイヌ民話
を掲載している状況であった。⁽⁵⁾

V. 『アイヌ民話』の背景 —時代・吉田巖—

工藤が帯広に赴任した2年後、吉田巖が庁

立伏古第二尋常小学校校長として赴任する。同校は北海道旧土人保護法によって設置、運営されていた。学校設置の場所は、一般に「伏古アイヌコタン」と呼ばれ、学校は単に「アイヌ学校」と言われていた。この学校は庁立日新尋常小学校と改称(大正8年12月)され、昭和6年8月末日に廃校になる。それまで吉田は15年8ヶ月勤務した。吉田は「アイヌ学校」を通してアイヌの指導者として活躍する。その吉田と工藤梅次郎とは密接な関係を持っていたと考えられる。吉田を抜きにしては『アイヌ民話』⁽⁶⁾の序文に書いてあるように吉田のアイヌ民族に対する心情も推測出来る。因みに吉田校長の教員生活については、加藤ナミエの証言から窺い知ることが出来る。また、『アイヌ民話』の挿絵・写真は伏古アイヌコタンの様子を知ることが出来る。工藤が入手、撮影したものであると考えられる。これらは文章とともに工藤のアイヌ民族への思いがわかる。また、下記の年譜⁽⁷⁾からアイヌ民族の往時の状況、工藤の民話採録の時代背景が推測され

の序文に書いてあるように吉田のアイヌ民族に対する心情も推測出来る。因みに吉田校長の教員生活については、加藤ナミエの証言から窺い知ることが出来る。

また、『アイヌ民話』の挿絵・写真は伏古アイヌコタンの様子を知ることが出来る。工藤が入手、撮影したものであると考えられる。これらは文章とともに工藤のアイヌ民族への思いがわかる。

また、下記の年譜⁽⁷⁾からアイヌ民族の往時の状況、工藤の民話採録の時代背景が推測され

〈アイヌ民族史を中心としての年譜〉
明治以降

	北 海 道	日 本
1869 (明 2)	北海道開拓史をおき(7)、蝦夷を北海道と改める。	
1872 (〃 5)		開拓仮学校(3)
1873 (〃 6)	アイヌに苗字を用いることを許し、その戸籍がつくられる。	
1875 (〃 8)		千島・樺太交換条約(5)
1876 (〃 9)	クラーク着任し、札幌農学校開校(8) アイヌに姓氏用いられる(9)	
1877 (〃 10)	J. Batchelor 来道 (7~8)	E. s. Morse 来日し(6)、大森貝塚発見(9)
1878 (〃 11)	アイヌを旧土人と呼ばせる(11)	
1879 (〃 12)	函館博物館(5)	
1880 (〃 13)	北海道開拓雑誌(1)	
1881 (〃 14)	札幌博物館(8)	
1882 (〃 15)	開拓使：蝦夷風俗語彙(2)	
1883 (〃 16)	永田方正：北海道小文典	
1884 (〃 17)	バッチェラー：蝦夷今昔物語 北海道志	
1885 (〃 18)	開拓使事業報告	I. L.. Bird: Unbeaten Tracks in Japan 人類学会報告(2) 三宅米吉：日本史学概要 コロポックル対アイヌ論争はじまる。
1886 (〃 19)	三県廃止・北海道庁設置	
1887 (〃 20)	J. Batchelor: An Ainu Grammar	
1888 (〃 21)	坪井・小金井来道	
1889 (〃 22)	バッチェラー：夷・和・英辞書第一版	大日本帝国憲法発布(2)
1891 (〃 24)	永田方正：北海道蝦夷語地名解	
1892 (〃 25)	札幌史学会(4) 村尾元長：あいぬ風俗略志	
1893 (〃 26)	郡司成忠らの千島開発	
1894 (〃 27)	バッチェラー：アイヌ生婚死の習俗	日清戦争(8)
1895 (〃 28)	札幌人類学会	考古学会(4)
1896 (〃 29)	関場不二彦：あいぬ医事談	考古学会雑誌(2)
1897 (〃 30)	札幌沿革史(2)	

	北海道	日本
1898 (明 31)		八木契三郎：大日本考古学 神保小虎・金沢庄三郎：アイヌ語会話辞典(4)
1899 (〃 32)	小樽港史 鳥居竜蔵の千島探検 北海道旧土人保護法公布(3)	
1900 (〃 33)	河野常吉の千島探検	
1901 (〃 34)		
1902 (〃 35)	林頭三：増訂北海紀行	
1903 (〃 36)		鳥居竜蔵：千島アイヌ(7)
1904 (〃 37)		日露戦争(2)
1911 (〃 44)	札幌区史 函館区史 くチャシ・コツ保存ニ関スル建議を道議会で議決	
1912 (〃 45)	河合裸石：ルーラン(1)	
1913 (大 2)	樺太アイヌ山辺安之助：口述『あいぬ物語』(11)	坪井正五郎，モスコで客死(5)
1914 (〃 3)		
1915 (〃 4)	北海道史編纂はじまる	
1916 (〃 5)	河合裸石：熊の嘯き(11) 新冠御料牧場内の姉去のアイヌ 80 戸，強制移住(3) 第 2 次「旧土人児童教育規程」公布(12)	
1917 (〃 6)		阿夷奴研究(4) 河内国府遺跡の発掘
1918 (〃 7)	武隈徳三郎：アイヌ物語(7)	鳥居竜蔵：有史以前の日本歴史と民族(1)
1919 (〃 8)		
1921 (〃 10)	伏古コタン最後の熊送り(12)	
1922 (〃 11)	「旧土人児童教育規程」廃止。アイヌ子弟に対する教育を一般規程に準拠(4)	浜田耕作：通論考古学
1923 (〃 12)	「土人保導委員設置規程」制定(6) 知里幸恵：遺稿集『アイヌ歌謡集』	社会史研究(1) 金田一京助：アイヌ聖典
1924 (〃 13)	北海道庁：北海道史跡名勝天然記念物調査報告書(河野常吉編) 中田千畝：アイヌ神話(6) 青木純二：アイヌの伝説と其情話(7)	
1925 (〃 14)	バチェラー：アイヌの炉辺物語（河合裸石訳）	民族 清野謙次：日本原人之研究
1926 (〃 15)	工藤梅次郎『アイヌ民話』(3)	杉山寿栄男：アイヌ文様 上代文化研究会
1927 (昭 2)	十勝アイヌ，旭明社設立会合開始(5) バチェラー：我が記憶をたどりて(10)	
1928 (〃 3)		清野謙次：日本節季時代の研究 上代文化史前学雑誌(3)
1929 (〃 4)		
1930 (〃 5)	違星北斗：遺稿集：『コタン』(5) 河野常吉逝く(9) 北海道アイヌ協会：機関誌『蝦夷の光』(11) 英人マンロー，平取村ニ風谷でアイヌの診療・研究(11) 札幌犀川会(12) 北方時代(12) 北方郷土(12)	
1931 (〃 6)	蝦夷往来(1) バチェラー八重子：若きウタリに 喜田貞吉来道(6) N. G. Munro 平取に永住 第 1 回北海道先史時代遺物博覧会(10)	金田一京助：ユーカラの研究 「満州事変」(9)

る。

工藤梅次郎はアイヌ民族の歴史と現況を見て、「衰残」の民族と記述している。また、明治政府が推し進めた同化政策史（アイヌ民族の世界観生活基盤等を無視する政策）への言及はない。「和人」の世界観でアイヌ民話を採録しているのは時代的限界であろうか。例えば、「鈴蘭の花敷で」等⁽⁸⁾の民話は工藤の創作民話である。

ま と め

- 1) 工藤梅次郎と工藤を取り巻く人物を上記でかなり明らかにすることが出来た。ただし、帯広勤務時代前後をさらに明らかにする課題が残っている。工藤梅次郎の全生涯とアイヌ民族研究との関係をもっと明確にしなければならないと思っている。また、『アイヌ民話』の発行所工藤書店の関係究明も現在調査中である。
- 2) 94話のアイヌ民話の分析が最大の課題である。民話の内容分析を先学の研究者の分類で良いのかどうかという問題も含めて収録民話を検討する課題がある。特に、刊行中の吉田巖資料、ジョン・バチュラー資料等との比較検討の課題がある。
- 3) 例えば、武隈徳三郎『アイヌ物語』のような十勝アイヌ民話集、研究書等に関する調査も残されている。

今回の論説を記述するに当たって、北海道立図書館北方資料室・北星学園大学図書館・古書店サッポロ堂書店を始めとしてたくさんの機関・方々のお世話になりました。衷心より御礼申し上げます。

また、間違い・失礼なことその他が御座いましたらお知らせいただければ幸いです。

[注]

- (1) 青木純二については1993年度北海道紋別市

『環オホーツク海文化の集い』報告書の拙稿を参照のこと。中田千畝については『北星論集〔文〕』第40号〔2003年〕の拙稿を参照のこと。

- (2) 安田巖城については、『北海道大百科事典』下巻 北海道新聞社昭和56年8月(820)に紹介されている。また、帯広百年記念館編『ふるさとの語り部』第8号平成4年10月(150)の安田米子の「安田巖城について語る」の記述は、『アイヌ民話』の序文に「辱交」と書かせた人柄を偲ばせるものがある。
- (3) 吉田巖については、帯広市教育委員会『帯広叢書 吉田巖資料集』シリーズで紹介されている。前掲書『ふるさとの語り部』『北海道大百科事典』等にも紹介されている。
- (4) 松山亮については、本文中の引用文献に記述されている。また、前掲書『ふるさとの語り部』第七号平成3年11月(178)は、松山自身の「大谷高校の設立についての事情や苦勞を語る」を掲載している。
- (5) 『帯広市史』昭和51年3月(729～)の記述を要約して本文記述した。
- (6) 前掲書『ふるさとの語り部』第4号平成元年12月(108-125)昭和51年3月26日収録、聞き手清原元之の加藤ナミエの聞き取りを参照のこと。
- (7) ふじもとひでを『アイヌ研究史——ある断面——』みやま書房、昭和43年3月(209-211)を参考にした。
- (8) 拙稿「大正期における民話集」参照のこと。(『平成14年度普及啓発セミナー報告集』：財アイヌ文化振興・研究推進機構、2003年3月、80-82)

[引証文献]

- 帯広百年記念館編『ふるさとの語り部』第4、7、8号 平成元年、同3年、同4年。
 『帯広市史』帯広市 昭和51年3月。
 『十勝人物評伝』帯広：十勝日日新聞社、大正12年12月。
 『十勝宝盟鑑』帯広：十勝三興社、大正14年2月。
 『〔北海道〕の新聞と新聞人』札幌：北海春秋社、昭和10年12月。
 『東北海道人物大観〔十勝帯広篇〕』帯広：道東評論社、昭和25年12月。
 『新聞人名辞典』第2、3巻、日本図書センター、1988年2月。

[参考文献]

- 『あ、樽新』樽新ジャーナル会昭和63年5月。

『小樽新聞』（部分閲覧）。

内館泰三「国勢調査と北海道旧土人」（『殖民公報』第118号，大正10年1月，23-31），また，復刻版合冊『殖民公報』第15巻，札幌：北海道出版企画センター，1992年2月に収録されている。

『ふるさとの語り部』帯広百年記念館，第1～20号『帯広叢書 吉田巖日記・資料集』帯広市教育委員会，第20～40巻

吉田巖著小林正雄編「アイヌ童話」（『帯広市社会教育叢書 NO.10』吉田巖伝記資料，昭和40年3月）

小川正人・山田伸一編「十勝毎日新聞（1920-1939年）掲載 アイヌ関係記事：目録と紹介(1)」（『帯広百年記念館紀要第19号別刷』2001年3月（p1-42））

松本尚志「アイヌ民族と北海道〈開拓〉」（『トカチ（十勝史研究）』第13号，2001・春）

『北海道大百科事典』北海道新聞社，昭和56年8月。

竹ヶ原幸朗「近代日本のアイヌ教育——同化教育の思想と実践——」（『北海道の研究6 近・現代篇II』精文堂，昭和58年10月，453-492）

小川正人『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会，1999年11月。

『幕別町百年史』北海道・幕別町，平成8年10月。ふじもとひでを『アイヌ研究史——ある断面——』みやま書房，昭和43年3月。

田端宏・桑原真人監修『アイヌ民族の歴史と文化教育指導の手引』山川出版社，2000年8月。

北海道【編纂】『新北海道史年表』北海道出版企画センター，1989年3月。

北海道新聞社編『年表で見る北海道の歴史』北海道新聞社，2001年7月。

木村尚俊他編『北海道の歴史60話』三省堂，1996年3月。

音更町史編さん委員会『音更町史』北海道・音更町，昭和55年12月。

新得町史編さん委員会『新得町史』北海道・新得町，昭和30年5月。

西帯広郷土史編集委員会『西帯広郷土史』同委員会，昭和55年9月。

中谷勝則編集責任『然別百年（然別地区開拓史）』北海道・音更・然別地区開拓百年記念事業協賛会，平成元年12月。

〔付記〕

本研究は，2003年度 北星学園大学特別研究費（研究題目：新聞人にみる「アイヌ民話」受容について）による研究成果の一部である。

[Abstract]

A Study of Hokkaido Folk Tales No.3:
An Examination of *Ainu Folk Tales* by Umejiro Kudo

Toshio ABE

This paper presents the Ainu part of a series of studies on Hokkaido folk tales by the author. In the Taisho Period, journalists played an important role in introducing Ainu folk tales widely in Japan. Junji Aoki with *Ainu Legends and Romances Among Them*, Chiune Nakata with *Ainu Myth* and Umejiro Kudo with *Ainu Folk Tales* were among them. They approached such contemporary established scholars of Ainu Folklore as Kyosuke Kindaichi, Itsuhiko Kubodera and the like, to whose studies, however, they tried to offer different perspectives. This paper examines their attempts by researching their methods of editing collections of folk tales. Kudo made use of his journalism networks and local societies when compiling and distributing *Ainu Folk Tales*. There are relationships between Kudo's creativity and the Ainu folklores that he compiled, and relationships between him and the understanding of the Ainu as an ethnic group by Japanese in general during the 1920s (the Taisho Period).